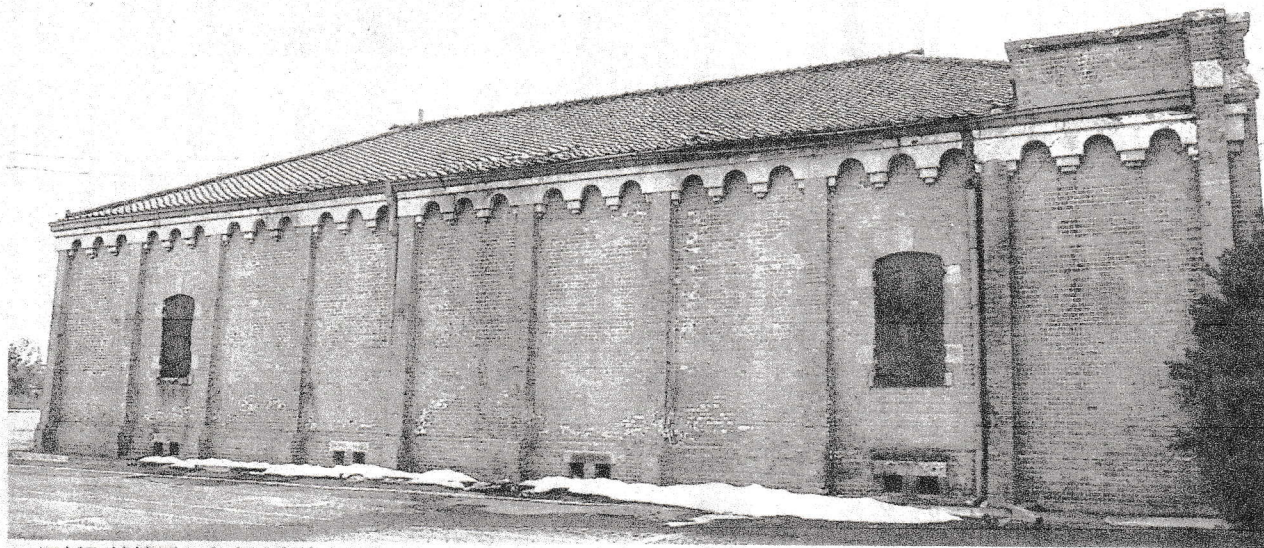


古建築を訪ねて

国支えた旧新町紡績所 今も創意工夫



旧新町紡績所の倉庫＝高崎市新町



旧富岡製糸場の繰糸場＝富岡市

旧新町紡績所の工場
本館＝高崎市新町

絹糸には長繊維の繭から作る生糸と、短繊維の屑繭・屑生糸などの副産物から作る絹紡糸がある。旧富岡製糸場(富岡市)は前者、旧新町紡績所(高崎市)は後者を生産した。

旧新町紡績所設立の契機は、明治4(1871)年から米欧を歴訪した岩倉使節団の視察で当時日本では廃棄物であった屑繭や屑糸を英国が輸入し、絹紡績糸を生産していたことにある。

明治6(1873)年のウィーン万国博覧会に参加した佐々木長淳は欧州各地で絹紡績の技術を視察する。その後旧新町紡績所の所長となり明治10(1877)年に開業。佐々木の指導のもと、お雇い外国人グレイフェンの基本設計に従い、大工山添喜三郎ら日本人技術者が実施設計し施工。日本最初の機械工業化した官営絹糸紡績工場である。現在は業種を変え、クラシエ新町工場が食品事業を展開する。

平成27(2015)年に工場本館・機関室・修繕場・倉庫・二階家煉瓦庫が国指定重要文化財、同年に建設当初の敷地部分が国史跡となる。

工場本館は現在も稼働する施設の一つであるが、屑糸繭より精綿を作る第一業工場と、精綿より絹糸を作る第二業工場部分の当初の中核部をよく残す。旧富岡製糸場の繰糸所の工程と比べて、機械加工が多いことから窓が小さくてすみ、軒高は低くなり、それが外観に現れている。

旧新町紡績所の価値は、①明治期の絹糸紡績工場唯一の現存遺構②日本人技術者が中心となり建設した最古の木造洋式工場③ウィーン万博を契機とした紡績技術導入など3点。

絹紡糸は生糸に比べて太く、光沢はないが独特の温かみと柔らかさを持つ。日本各地に見る銘仙・縮・肌着・靴下などに用いられ、生糸より身近で庶民に好まれてきた。

絹紡糸の生産高をみると、明治末期から大正初頭までは欧米が高いが、昭和初頭には日本が世界の過半数を占め世界一となる。

旧新町紡績所は日本最初の絹糸紡績工場であり、旧富岡製糸場とともにわが国を代表する貴重な絹産業遺産なのだ。

旧新町紡績所は文化財的価値を150年近くも引き継ぎ、創意工夫して現在も使用している。これはまれなことで所有者の先駆的な理念に敬意を表したい。

(群馬県文化財保護審議会 副会長・村田敏一)